



壁貫の大きさ(寸法)に付いて、柱(壁厚)の大きさによって貫の大きさが異なる。最近では柱の大きさが135～120mm(4.5～4.0寸)角が主流で、壁貫の大きさは180～150mm(6～5分)×120～105mm(4.0～3.5寸)が使用されている。貫穴は貫材より3mm(1分)位大きく、楔代(くさびしろ)18～15mm(6～7分)(楔の締る余地)大きく彫る。

壁貫の拾い出しに付いて、1本1本拾い出すことも大切だが、多少のロス(損失)補足材を算入することが必要である。軸組材拾い出しの際には、木舞掻き荒壁塗り面積を算出しておくことが必要で、(造作仕上げでの拾い出しでは無駄が多い。)

壁貫数量の算出の目安として、木舞掻面積 $1\text{m}^2 \sim 2.5\text{m}^2$ を目安とするとよい。特に1か所が 1m^2 以下が全体か所の5割以上の場合は、1割増とする。

★木舞掻面積に付いて、設計実数量・必要数量(所要数量)を算出する。

木舞掻面積計算に付いて、柱間内法×横架材間内法に計算したのが、設計実数量で1階2階に分別する。木舞掻用材(竹)や木舞掻労務費が1か所の大きさによっての違いが大きいので、(1か所面積が大小様々)、1か所面積 2m^2 以下 1m^2 迄の場合 1m^2 1か所面積 1m^2 以下の場合、 5m^2 を各各加えた面積を、必要数量(所要数量)で1階2階に分別する。必ずか所数を記載すること。

※日本古来の日本建築の伝統工法(真壁工法)で木舞掻き荒壁面積は建物延面積の2倍を目安としていた。

● 間柱(まばしら)

間柱は基本的に仕上げ下地材で、(準躯体部位)、大壁と真壁・併用壁に分ける。開口部の大きい出入口以外の開口部(窓)等はそのまま壁として考え、出入口等の上部小壁の間柱を加算して拾い出しをする。設計図書に間柱の大きさ(寸法)の指示がない場合は、慣例として大壁の場合は柱の三割を使用する。真壁境や柱当りの間柱等では平割程度とする。

現在の木造住宅(在来軸組工法)の間柱数量の目安として(大壁造りとして考えて)柱数量の2倍の数量(本数)、1.2階分別すること。但し大壁用、併用壁用、真壁用に分けること。柱当り間柱(打越し・受け木)が必要とする場合(仕上げ材・下地材等による)、拾い出しの目安として部屋各部位の数位に対して2.5本の数量(本数)とする。